



③ 豊受神社 (土佐藩)

④ 三柱神社 (棚倉藩)

① 宇倍神社 (鳥取藩)

② 水天宮 (久留米藩)

⑤ 久留米水天宮 (久留米藩)

⑥ 三嶋神社 (松山藩)

⑧ 八管神社 (土佐藩)

開拓者の軌跡から入植者たちが心の拠り所とした神社まで
郡山市・猪苗代町 構成文化財MAP

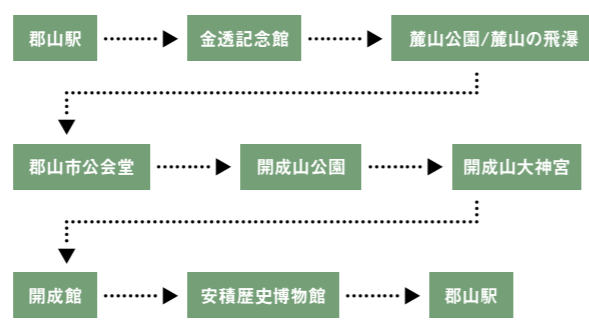


豊かな水の恵みを堪能する郡山の鯉料理

疏水の恩恵を受けて盛んになった鯉の養殖。郡山市は市町村としては全国一の鯉の生産量を誇る。「正月荘」では「鯉こく」や「洗い」といった定番料理のみならず、中華風など様々な鯉料理が楽しめる。

【正月荘】
 ④郡山市大槻町字水門東1-20
 ☎11:30～14:00 / 17:00～22:00
 ⑤日曜日 ☎024-983-3199 (予約制)

**構成文化財+aを巡るおすすめ周遊コース
 【安積開拓発祥の地・開成山と郡山歴史散歩】**



未来を拓いた「一本の水路」日本遺産ストーリーWEBサイト



郡山へのアクセス

■ 電車で		■ 車で	
東京駅	東北新幹線で約80分	浦和IC	東北自動車道で約150分
仙台駅	東北新幹線で 約20分	仙台南IC	東北自動車道で約90分
いわき駅	磐越東線で約100分	いわきIC	磐越自動車道で約50分
会津若松駅	磐越西線で約80分	会津若松IC	磐越自動車道で約40分

■本パンフレットのお問い合わせ先→日本遺産「一本の水路」プロモーション協議会 ☎024-924-3711
 ■本パンフレットは平成28年度文化芸術振興費補助金(日本遺産魅力発信推進事業)により作成したものです。
 撮影/大村仁 地図/ジェオ イラスト/アカハナドラゴン



日本遺産を旅する

未来を拓いた「一本の水路」——大久保利通 “最期の夢”と開拓者の軌跡 郡山・猪苗代——



福島県
郡山市
猪苗代町

夢の実現のために集った「人・モノ・技」

明治時代の日本が手がけた一大プロジェクト
 「安積開拓・安積疏水開さく事業」
 水路だけではなく、
 未来をも拓いた挑戦者たちの物語。

日本近代化のため
 安積開拓・安積疏水開さく事業を推進
大久保利通



**奇跡の
 安積疏水事業を
 成功へ導いた
 開拓者の軌跡**



安積疏水全図

猪苗代湖の東、安積原野の西には奥羽山脈が連なり、安積原野への疏水がいかにも困難であったかがわかる。(所蔵・安積疏水土地改良区)

安積原野へ一本の水路を…

豊饒の湖からの疏水、不可能に挑んだ男たち

日本遺産のストーリー

明治維新後、武士の救済と、新産業による近代化を進めるため、安積地方の開拓に並々ならぬ想いを抱いていた大久保利通。夢半ばで倒れた彼の想いは、郡山から西の天空にある猪苗代湖より水を引く「安積開拓・安積疏水開さく事業」で実現した。

奥羽山脈を突き抜ける「一本の水路」は、外国の最新技術の導入、そして、この地域と全国から人、モノ、技を結集し、苦難を乗り越え完成した。この事業は、猪苗代湖の水を治め、米や鯉など食文化を一層豊かにし、さらには水力発電による紡績等の新たな産業の発展をもたらした。

未来を拓いた「一本の水路」は、多様性と調和し共生する風土と、開拓者の未来を想う心、その想いが込められた桜とともに、今なおこの地に受け継がれている。

文・監修／桐野作人

歴史作家、武蔵野大学政治経済研究所客員研究員。出版社の編集長を経て独立。織豊期(安土桃山)や幕末維新史を中心に執筆・講演を行っている。1954年生、鹿児島県出身。

江戸時代からの夢物語・安積疏水原野に一筋の光が射した開拓前夜

目の前には漫々と水をたたえた猪苗代湖があった。北に聳える磐梯山から吹き下ろすのだろうか、強い寒風によって生じた波が湖岸に激しく打ちつけて大きな水しぶきをあげている。猪苗代湖の水は西の会津地方には流れるが、東の安積地方には流れない。奥羽山脈が立ちはだかっているからだ。

今から140年前、あの男もきつこの湖畔に立ち、この景色を眺めて闘志を燃え立たせたとはいえないと思った。あの男とは中條政恒のことである。もと米沢藩士で明治5年(1872)秋、福島県に赴任した。彼は開拓掛となって、先に頓挫した北海道開拓の夢を福島県で何とか実現したいという強い使命感に突き動かされていた。

「この天空の湖水を何とか安積の原野に引けないものか…」

中條を含めた開拓者たちは皆、湖畔でそう呟いたに違いない。

江戸時代から疏水を通そうという動きはあったが、当時の技術力では到底無理だった。安

積地方の弱点は雨が少ないことによる水不足だった。江戸時代の農民たちは水をめぐって争い雨乞いをしたが、原野が潤うことはなかった。だが、中條は先人たちの挑戦の歴史を受け継ぎ、この原野を沃野に変えるため不屈の精神で疏水事業に挑んでいくのである。

中條は福島県への赴任にあたり、県令の安場保和(旧熊本藩士)に「決して口を挟まず、私にすべてを委任していただきたい」と約束させていた。安場も岩倉使節団に随行してアメリカを視察し、開拓の重要性を承知していたので、すべてを中條に任せることにしたのである。



安積原野の貧しさと悲哀を書いた宮本百合子(1899~1951)

「安積開拓の父」とも呼ばれた中條政恒を祖父に持つ小説家、評論家。弱冠17歳にして、安積開拓期の厳しい入植者たちの暮らしを描いた「貧しき人々の群」を上梓し文壇へ。天才少女と評された。



夢の賛同者たちが、この地で出会う

高まる情熱、動き出した奇跡の開拓事業

官民が一体となり本格化していく 安積原野の開拓・疏水事業

郡山村の西方に大槻原おおつきはらという原野があった。安場はこの地に旧二本松藩の士族たちを入植させようとした。彼らは戊辰戦争で会津藩に味方したため、政府軍に攻められて困窮していた。大槻原はかつて二本松藩領だったため、同藩士族たちを入植させて生計を立てさせようと考えたのである。翌年4月、19戸が入植した。

中條は原野開拓のため、郡山の豪商たちを熱心に説いてまわった。初めは「米沢キツネにだまされるな」と相手にされなかったが、中條は諦めるどころか「富豪といえど、村や国のために尽くさねば、守銭奴の侮辱は免れぬ」と厳しく迫っていったのだ。やがて豪商たちも中條の熱

意にほだされ、阿部茂兵衛らが賛同する。最終的には阿部を含めた25人が出資に応じて、民間の開墾会社・開成社が設立された。

同じ頃、開拓にあたり、福島県は告諭書を出した。その一節には「一尺を開けば一尺の仕合あり、一寸を懇すれば一寸の幸あり」とあった。開拓事業への切実な思いと困難さを感じさせる。

明治6年(1873)4月、安場の命で中條は大蔵省へ申請書を提出し、開墾地払い下げと資金7千円の貸し付けを受けることに成功した。かくして県の指導の下、開成社との官民協働による安積開拓事業が本格化していくのである。

そして、この開拓・開墾事業が明治政府の大政治家・大久保利通を動かし、その後の疏水事業へとつながっていく。



開成館

「安積開拓発祥の地」にある、福島県開拓掛が設置された当時の郡役所。擬洋風の建築が目目を惹く建物。明治天皇の東北御巡幸では行在所(宿泊所)にもなり、現在は安積開拓や安積疏水に関する資料等が展示公開されている。

- ④郡山市開成3-3-7
- ⑤10:00～17:00(入館は16:30まで)
- ⑥月曜(月曜が祝日の場合は翌日)

※濟世遺言…大久保利通が命を落とす当日の朝、県令・山吉盛典に語った安積疏水事業や明治の将来について(30年計画)の言葉

きんとう 金透記念館

明治9年(1876)の明治天皇東北御巡幸の際、随行していた木戸孝允が「金透学校」と名付けた校舎の一部を復元した建物で、開成館と同様に擬洋風建築。毎週木曜日の午後1～4時まで無料で見学することができる(※完全予約制)。



④郡山市堂前町5-19(金透小学校敷地内)



大久保利通ゆかりの地と品

① 紀尾井町事件当日、大久保が棲み入っていた東京府知事・楠本正隆からの血に染まった書簡(所蔵・国立歴史民俗博物館) ② 大久保の命日に行われている「甲東祭」の様子(東京・青山霊園にて) ③ 大久保神社。社殿はなく顕彰碑が建立されている

大久保利通

明治維新後に参議就任。中央集権体制を確立すべく豪腕を振る。盟友だった西郷隆盛とは、征韓論で対立。西郷らを失脚させることで、初代内務卿に就任した後は士族授産、日本の近代化のために尽力した。西郷、木戸と並び「維新の三傑」と称される。明治11年、紀尾井坂(東京都千代田区紀尾井町)にて暗殺された。趣味は囲碁。座右の銘は「為政清明」「堅忍不拔」。



盟友よりも開拓を選び、日本の発展に命を賭けた政治家
志半ばで倒れた大久保利通、最期の夢

事業成功に向け奔走した大政治家の功績
大久保利通と安積開拓年表

文政13年(1830)	●薩摩国鹿兒島城下高麗町(現在の鹿兒島市)に生まれる
明治2年(1869)	●版籍奉還、廃藩置縣など明治政府の中央集権体制確立を行う
明治4年(1871)	●大蔵卿就任後「岩倉使節団」副使として諸外国を歴訪
明治5年(1872)	■福島県令に安場保和が、典事に中條政恒がそれぞれ着任する
明治6年(1873)	●内務省を設置し、初代内務卿就任 ●学制や地租改正、徴兵令などを実施 ●「富国強兵」をスローガンとして、殖産興業政策を推進した ■開成社が結成される
明治9年(1876)	●明治天皇の東北巡幸の下見で中条政恒と出会う ●郡山における大槻原開拓の成功を見聞し、政府へ報告 ■明治天皇が東北巡幸の際に桑野村へ行幸
明治11年(1878)	(3月) ●福島県下安積郡の原野開拓を建言 ●桑野村に開墾事務本局を設置 (5月14日) ●福島県令・山吉盛典と会談した後、紀尾井坂で石川県士族、島田一郎ら6名に暗殺される
明治12年(1879)	■政府が安積野原野開墾事業、安積疏水工事の開始を許可

※年表内、●は「大久保利通」関連、■は「安積開拓」関連

最後の日まで事業について語った
開拓の主導者・大久保利通

この開拓事業に、東京から熱い視線を向ける大物がいた。明治政府を動かす薩長藩閥の実力者、内務卿・大久保利通である。

明治4年(1871)に岩倉使節団の副使として欧米を視察した大久保は国家目標を「殖産興業」による富国政策と定め、戊辰戦争で荒廃した東北の地の復興・開拓と、没落する士族層への授産対策を重視した。

明治9年(1876)、明治天皇の東北巡幸に先発して各地を視察した大久保は「わが国の富強の基はこの地に在り」と、東北地方の将来性に着目する上申書を右大臣・岩倉具視に送っている。

大久保は民間の情熱と官の指導が見事に結合したこの地に「殖産興業」の理想形を見出したのである。

同年8月、大久保は内務省に授産局を設け、殖産興業の重点政策を示した。ところが翌年、西南戦争の勃発により事業の雲行きが怪しくなる。明治10年(1877)9月、中條は大久保に呼ばれ、内務省で大久保と面談した。ちょうどそのとき、電信が届けられた。それは大久保の盟友だった西郷隆盛が鹿兒島の城山で最期を迎えたという急報だった。だが、顔色ひとつ変えない大久保を見て、中條は畏敬の念を抱く。それでも中條は、なぜ安積疏水事業が進展しないのかと迫

った。すると、大久保は「自分の決心はあくまで必成の覚悟である。もし朝廷で取り上げられなかったら、この利通が誓って尽力する。安心せよ」と答えたため、中條は目の前が開けるような安堵を覚えた。

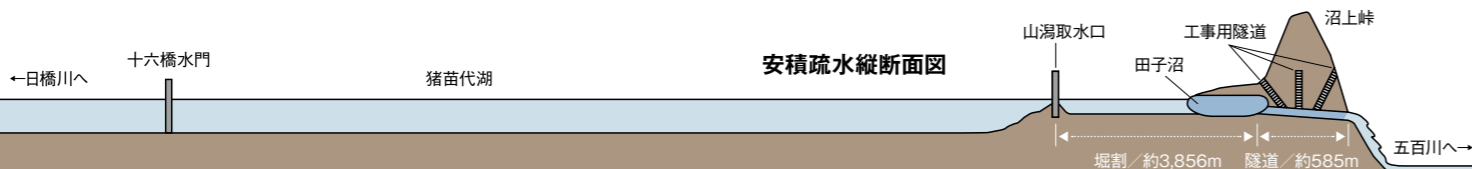
翌11年3月、大久保は中條に約束したとおり動き出す。桑野村に内務省勸農局の開墾事務本局を設置し、部下の奈良原繁を御用掛として派遣した。

同年5月14日、大久保利通落命。安積疏水事業がまさに始まろうとするとき、紀尾井町で不平士族に襲撃されてしまったのである。

その日の早朝、安場に代わって県令となった山吉盛典の訪問を受けていた大久保は有名な30年計画(濟世遺言)を語り、安積疏水事業にも細々と注意を与えたという。大久保は死の直前まで安積疏水のことを気にかけていたのである。翌日、その凶報を知った中條は悲嘆のあまり一睡もできなかったという。まさに巨星落つという大事件であり、事業にとっても大打撃となった。

大久保は後世、有司専制などと非難されるが、有能な部下に仕事を任せ、責任は自分が引き受けるという懐の深い大政治家で、戊辰戦争で敵対した旧幕臣さえも「明治唯一の大宰相」と称賛したほどである。そして、大久保にとって東北振興は見果てぬ夢であり、安積疏水事業はその核心だったのである。その雄図のとおぼ口で落命した大久保の無念、もって瞑すべしである。

安積疏水縦断面図



じゅうろっきょう
十六橋水門

安積疏水事業で最初につくられた水門。湖水を安積原野へ流すため猪苗代湖の水位を調整する役割を担っていた。十六の長大な石造アーチは当時、圧巻であった(写真・左上)。その後は近代化産業遺産にも認定され、傍らにはファン・ドールンの銅像が建立されている。



ファン・ドールン

オランダの土木技術者。2度目の来日で携わることになった安積疏水事業では他国事業との比較から精密な計画を立てるなど多大な貢献をする。



近代技術、最先端機器、そして開拓者たち

疏水の実現に向けて国内外から集結した人・モノ・技

奥羽山脈を切り拓いた最新技術と
挑戦者たちの不屈の精神

大久保利通「最期の夢」は中條を介して次の内務卿・伊藤博文へと引き継がれた。事業は疏水開削のルート選定からはじまった。設計にはオランダ人長工師のファン・ドールンが参加し、湖の水位・水量の測定などに最先端の技術や道具を持ち込んだ。明治12年(1879)10月27日に開成山大神宮において起工式が執り行われ、翌28日に着工する。工事はまず、会津側住民の不安を解消するため、戸ノ口と布藤の浚渫工事や十六橋水門の新築工事から着手された。翌年秋からは、いよいよ疏水路の掘削工事がはじまった。これには先に入った二本松藩の後、真っ先に入植してきた旧久留米藩士(その後、岡山藩、土佐藩、鳥取藩、会津藩、棚倉藩、松山藩、米沢藩が次々に入植する)による久留米開墾社をはじめ、全国からの有志が進

んで工事に従事した。ほか「寸志夫」と呼ばれた、今でいうボランティアも多く参加した。

このうち、難工事となったのは田子沼の水抜き工事と沼上峠の貫通工事であった。後者は約2千7百メートルにわたり石組みの溝渠による隧道を掘り抜くという最難関の工事だった。夏の酷暑と冬の寒風にさいなまれながらも、入植者や各地からの技術者、寸志夫たちは工事現場に通い続けた。事業の成功や作業の安全を祈願するために、彼らは毎朝、地元からの分霊を祀った神社や安積疏水神社に参拝してから現場に向かったと言われている。溝渠の設置には大分の石工たちの技術が貢献し、岩石を破碎するためのダイナマイトなど、外国の最新技術も用いられた。このように、多くの人々の力と技術を結集して沼上峠の東面が開くと、怒濤のように湖水が噴出して斜面を流れ落ち、その凄まじさは「震天瀑」と名づけられ、のちにこの地には沼上発電所が建設された。



安積疏水神社

現在の丸守発電所の近く、五百川沿いに佇む神社。安積疏水の守護神として、作業員たちが毎日の工事の前に立ち寄り、事業の成功と作業の安全を祈ったとされる。

安積開拓発祥の地

開成館や入植者たちの住居がある、当時の事業中心地。復元された安積開拓官舎や「愛媛松山開墾(松山藩)」が暮らした「四間×六間(しろくま)」などを見学できる。
④郡山市開成3-3-7
⑤10:00~17:00(入館は16:30まで)
⑥月曜(月曜が祝日の場合は翌日)



開成山大神宮

入植者たちが心の拠り所とした、伊勢神宮からの分霊を祀る神社。人心の融和統一を考え、造営には中條も大きく貢献した。「東北のお伊勢さま」とも呼ばれ、宝物殿には太刀「勝光」と槍「国綱」が展示される。写真下は宮本孝宮司(左)の説明を聞く筆者。
④郡山市開成3-1-38



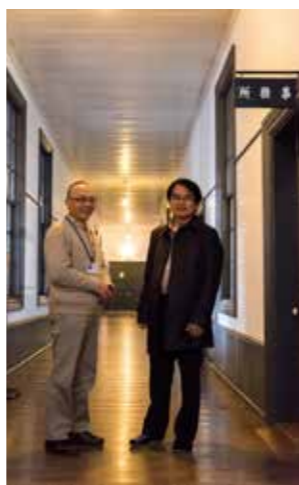
安積疏水 麓山の飛瀑 (写真・上)

通水を盛大に祝った「麓山公園」の一角に流れる滝は開成社等によって造られた。公園内には疏水を彷彿させるモニュメントも(写真・下)。
㊤郡山市麓山1-347



旧福島県尋常中学校本館 (安積歴史博物館)

開拓による急速な発展、農民たちからの土地の寄贈等によりこの地に設置された。国の重要文化財であり、瀟洒な建築美を堪能できる。写真右は同館理事・橋本文典氏(左)との1枚。㊤郡山市開成5-25-63 ㊤10:00~17:00 (入館は16:30まで)



沼上発電所

明治32年(1899)に運用を開始した発電所。日本初となる高圧電力の長距離送電(現在の郡山市までの約23キロ)に成功し、紡績や繊維産業の発展を支えた。
㊤郡山市熱海町安子島



猪苗代第一発電所

大正3年(1914)に運用開始。当時の出力(37,500kw)は東洋一の規模であった。配管となる6本の水圧鉄管の長さは約400メートルにも及ぶ。
㊤会津若松市河東町八田薬畑

明治政府初となる国営事業・安積疏水の完成

苦難の先に流れはじめた、憧れの猪苗代湖からの水

政府要人も祝った一大事業の成功 その奇跡を支えた開拓者たち

かつては不可能だと思われていた疏水事業は、わずか3年1カ月という短い工期で大きな事故もなく完了した。完成した水路の長さは分路も合わせると約130キロ、その間動員された延べ人数は85万人、総工費は40万7千円(現在の貨幣価値で約450億円相当)におよぶ、まさに国を挙げての一大事業であった。

やがて、彼らの悪戦苦闘が爽りを迎える時がきた。明治15年(1882)8月、試験通水が

実施されると、沼上峠を貫いて安積の原野を流れる猪苗代湖からの水を、人々は歓喜の声をあげながら追いかけたという。古くは江戸時代から開拓者たちが思い描き続けた夢が、そして大久保利通にとっての最期の夢が、ここに実現したのである。

明治15年(1882)10月1日、起工式も行われた桑野村の開成山大神宮において通水報告祭が挙行され、政府からは右大臣の岩倉具視、大藏卿の松方正義などの要人が参加した。他にも各開墾社の社員や村人たちが多数参列し、盛大に挙行された。また近くの麓

山公園には数万人もの人々が集まり、数百の提灯が掲げられた。そして、歌舞伎興行や花火の打ち上げによって、この空前の壮挙を祝ったのである。

麓山公園を晩秋の夕暮れに訪れた。もう園内にはほとんど人影はなく、「麓山の飛瀑」と呼ばれる人工の滝が音を立てて勢よく流れ落ちていた。これこそ通水当時のまま、唯一残る疏水跡(分水路郡山支線のひとつ)だと知った。130年以上経っても丈夫な滝に、往時の技術力の高さだけではなく、先人たちの入魂の深さを感じる事ができた。



開成山公園

①⑥毎年春に圧巻の光景を見せてくれる、開拓者たちが未来への想いととも植えつけた桜。その数は約1300本にもおよぶ
②宮本百合子の文学碑 ③17.6メートルもある塔の下には大久保利通や中條政恒のほか、開拓の尽力者たちが並ぶ
④伊勢神宮の前を流れる五十鈴川に、その名の由来があるとされる五十鈴湖 ⑤福島県が開拓にあたって出した告諭書の一説「開拓の心(一尺を開けば一尺の仕合あり 一寸を墾すれば一寸の幸あり)」が刻まれている石碑

恵みの水がもたらした発展と近代化

一本の水路が遺してくれたもの

紡績産業、豊かな食文化、桜… 切り拓かれた未来を体感する

安積疏水の恵みは非常に大きかった。かつての開拓者たちは米に大根やじゃが芋などを入れた「かて飯」を常食とした時期もあったが、疏水が原野を潤したことにより、米の作付面積は約4千ヘクタールから最大時1万ヘクタール以上に増え、収穫量も10倍以上へと飛躍的に伸びた。また豊富な水量を活かして鯉の養殖も盛んになり、現在ではその生産量が全国市町村で1位になっている。さらに疏水の落差

を利用した水力発電事業も始まった。明治32年(1899)、当時の最先端技術を結集し運用が開始された沼上発電所では、郡山に向けたわが国初となる長距離高圧送電に成功し、紡績や繊維産業の発展に大きく貢献することとなる。

気が付けば、かつて数千人程度しか暮らしていなかったこの地には、多くの人が集うようになっていた。そして、その後も学校や銀行が作られ、鉄道が開通するなど急速に近代化、発展していく。全国からの入植者、国内外の技術者、政府、そして安積の人々が調和しながら

らともに切り拓いた1本の水路が、まさしく未来をも拓いていったのである。

かつて県と開成社が開拓を進める中で少しずつ植えていった桜は、春になると開成山公園の土手一帯を覆い尽くし、市民の憩いの場となっている。二本松藩士族たちの入植から140年以上がたち、開拓者たちの軌跡を辿り、渺々たる安積の曠野がこうした美しい都市へと変貌を遂げた姿を見るにつけ、先人たちが流した血と汗と涙は決して無駄ではなく、この桜のように花を咲かせて結実したのだという思いを強くした。